

東京都市大学 工学部 建築学科

8学科を擁する工学部では、工学の原点である基盤技術から応用技術、最先端テクノロジーまで、充実した教育・研究プログラムにより“ものづくり”を通して産業界を支え、社会の可能性を無限に広げるエンジニアを育成します。



■大学生
矢野瑠子 さん



■先生
小林茂雄 先生



■卒業生
山根拓馬 さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

工学部建築学科の位置づけを教えてください。



■先生

本学の前身は武蔵工業大学で工学系の学部が中心でした。創立当初は工学部主体で3学科ほどしかなかったと思いますがその中のひとつが建築学科でした。その後、2009年に東京都市大学グループが誕生し、現在は6学部18学科の総合大学として、その地位を築いています。

本学だけではなくほかの大学でもそうですが、工学部にあるほとんどの学科には「〇〇工学科」とつけられています。

工学部自体はエンジニアリングを勉強する学科ですが、その中にある建築学科は、建築の構造や設備だけが工学部的なものとして存在しています。

例えばアメリカやヨーロッパなどの建築学科は、芸術・美術学部の中にあるのが通常です。ですから日本の工学部の建築学科は、工学部の中に位置していますが、実質的には工学的な内容と芸術的な内容を一緒に勉強しています。工学を中心に勉強するほかの学科と違い、美術学部のような一面も持ち合わせています。

■卒業生

何と言えば伝わりやすいでしょうか。

工学部は男子学生が多いイメージだと思いますが、事実その通りです。しかし、建築学科は女子学生がかなり在籍しています。

■大学生

確かに工学部内のほかの学科に比べて女性の割合は多いです。ほかの学科では女子学生が全体の1割に満たないというところがありますが、建築学科では女子学生が全体の約3割を占めています。

先生はどのような研究に取り組まれていますか？

■先生

メインの研究テーマは建築と都市の光環境です。空間の光の状態が人同士のコミュニケーションにどのような影響を与えるかということや、周辺環境を活かしたあかりによる街づくりに関することを研究しています。

最初は部屋の中の照明や、閉じられた空間の照明をどうしたらよいのかを研究していましたが、最近では街全体の道路や建物を含めて、どういったあかりがあったら良いかを、住民や行政、ハウスメーカーの方々と一緒に取り組んで考えています。

かつてはハウスメーカーとの共同といえば住宅の中の照明でしたが、今は分譲地全体の道路、外構、植栽などの照明に関わるあかり作りをやっています。

会社ではどのような業務に携わっていらっしゃいますか？



■卒業生

不動産でイメージされるのは近所の町にある不動産屋さんかと思いますが、その不動産ではなく、街づくりを行う不動産会社でディベロッパーと言われる職業です。2010年に入社して次の春には7年目になります。

事業内容を簡単に説明すると、オフィスや住宅、商業施設を開発し、賃貸もしくは売却によって収入を得る事業です。

私が初めに携わったのは新築ビルの企画・テナント誘致業

務です。そのあとに外部の金融機関に1年間出向して、戻ってからは自社物件の運営管理を行っていました。運営管理の業務内容は幅広く、毎日携わる仕事が変わっていましたね。

こうした業務を経て、開発企画部の街づくり推進室に異動し、現在は日本橋兜町の再開発を推進しています。将来の街の姿を描きながら、ソフト面からの企画を行う部署です。

現在の研究内容を教えてください。

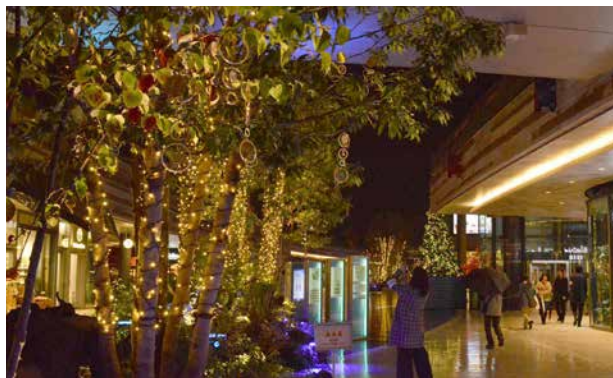
■大学生

現在は3年生でまだ仮配属ですが、先日4年生の先輩方が卒論を終えたばかりで、その卒論が終わるまでは4年生の各先輩のプロジェクト・研究のお手伝いをしていました。3年生が主体的に何かをするのはまだこれからという時期です。

この大学の近くに「二子玉川ライズ」という複合施設がありますが、先輩の中にはその環境演出のイルミネーションを研究テーマにされている方がいます。二子玉川は地形的に風が強いのが特徴ですが、それをオーナメントの反射やゆらぎといった動きにつながるように工夫して、実際に設置した後はアンケートを採っています。かなり広範囲に装飾していくため、3年生は全員そのサポートをします。

■先生

「二子玉川ライズ」のプロジェクトは本学との産学連携で3ヵ月ほど実施していました。二子玉川の特徴のひとつである、光や川や風といった自然を感じられるように、研究室でコンセプトを設定して設置しました。この活動を卒論でまとめている学生がおり、それを3年生が手伝います。普段は商業施設などもあるため、設置作業が夜11時以降しかできず、夜11時から翌朝6時くらいまで徹夜作業です。



■大学生

帰れない場合はライズさんに部屋を用意していただいて、その休憩室で順番に休みながら作業をします。設置自体は2日半程度で終わりました。

■卒業生

その前の作製作業も考えれば、なかなか時間がかかるよね。

●大学生活について

この大学に入ろうと思ったきっかけは？

■大学生

以前から建築士や建築家に興味があり、こういう仕事をしてみたいと思っていた時に、とある建築設計事務所のインターンシップがあって参加しました。

その際、その設計士の方から「東京都市大学からインターンシップで来た学生の方は真面目な学生が多い」というお話をうかがいました。また、実際に東京都市大学の教授からお話を聞かせていただき、誠実な学生が多いという印象を受け、この大学に入りたいと強く思うようになりました。

■卒業生

私ももともと建築に興味があったことが入り口です。鳥取県出身で、県外に出ていく人はほぼ関西に行きますが、私自身は設計をしたいと思っていたので、設計に強そうで面白い先生がいる大学はどこかという視点から考えていました。

そんな時に建築家の手塚貴晴先生が「屋根の家」という面白い家を造られていて、本を眺めていました。とても興味を惹かれて、この先生がいる大学に行ってみたいと思い東京都市大学に決めました。

東京都市大学の学生はどんな方が多いですか？

■先生

各自のカラーをしっかりと持っている気がします。建築学科の学生は、とにかく一生懸命に取り組む“熱い学生”として卒業していきます。

建築学科は、個人個人が1人で勉強して学ぶというよりも、チームやグループで何かをやりましょうという方法をとります。設計系の教育などは本学の教員だけでなく、専任以外の非常勤の先生が教えに来ますが、それはほとんど卒業生です。彼らがとても熱心に後輩たちに指導してくれて、その絆を強く感じます。

例えば、ある卒業生が20名ほどの学生グループに講義をしてくれますが、白熱しすぎて永遠に授業が終わらず「果たして何時までやるのだろうか？」と思ったことがあります。実際に授業を受けた学生に聞くと「朝方までやっていました」と言っていて、一生懸命やっていると時間を忘れてし

まうようです。これは極端な例かもしれませんが、これくらい懸命に指導する先生がいて、学生も知らないうちにこれが当たり前だと思ってきます。

建築に限ったことではありませんが、普通に学んでいては学生の能力はさほど発揮されません。例えば、スポーツも趣味としてやっているとしたら上達しませんが、部活などで厳しい練習をすることでその人の能力が伸びます。ある一時期厳しい指導を受けることになりますが、本学のそうした教育が学生の能力を引き出しているのではないのでしょうか。そして、卒業する時には何事にも一生懸命に取り組んで、力を発揮できるような体制が作られているのでしょうか。

■卒業生

大学に入ってくる時は10代で、そこから初めていろいろな大人と接したり、〇×だけでは解決しない問題に取り組んだりするので分からないことだらけです。“スパルタ”と言えばそうかもしれませんが、どちらかというところでは助けてもらっている感覚です。

■大学生

自分が一生懸命になったら、それに応えてくださる先生が多いです。

設計がうまく進まなかった時、先生に2～3時間ほど時間をいただいて意見をうかがったり、本を見せてくださったりと親身にご指導いただきました。

印象に残っている講義や講座はありますか？

■卒業生

過去に小林先生の授業で行っていた、大学内でのキャンパスイルミネーションが面白かったです。数名ずつのグループを作って夜のキャンパスをイルミネーションするのですが、もちろん皆経験がないですし、ゼロから考えなければならぬことばかりなので良い経験になりました。キャンパス内にグループごとの場所が与えられるので、まずはどういうコンセプトで進めるかを考えます。その後、照明器具や設置の仕方なども考えていきます。極端な事を言えば照明器具などは最終段階でもどうにかありますが、0から1をつくるコンセプトの部分が難しく、その産みの苦しみを経験できたことが大きかったですね。

■先生

この取り組みは2009年までやっていました。最近では学内よりも外でのイルミネーションイベントが増えました。

学生をサポートするための制度を教えてください。

■先生



インターンシップもありますし、建築学科で言えば最近ではノルウェーのオスロ建築デザイン大学と協定を結んで、大学院生が無償でノルウェーの大学に行くことができます。交換留学なので毎年オスロからも大学生が来ています。

また、制度ではありませんが、建築学科の学生が利用する新建築学科棟自体が学生のサポートを主眼に造られています。大学の建物はどの学科の学生でも使えるように

標準的な校舎にすることが一般的ですが、当時の建築学科の先生が設計された建築学科棟は建築を学ぶことに特化された建物です。1階は製図室になっており、いつでも学生が自分たちの造りたい物を造ることができ、グループで作業できる環境が整えられています。

建築学科は実習で大人数の作業が必要だったり、実寸の大きな住宅を造ったりするため、建物にはそれなりの容積や高さが求められます。そのような広大なオープンスペースを可動式パネルで自由

に変化させることで、授業、制作、プレゼンテーション、講演会など、機能を限定せずに様々なイベントができる場所になっています。

入学してからの印象を教えてください。

■大学生

この大学というよりは大学自体の印象ですが、やはり高校までとは違うなと感じました。

山根さんがおっしゃっていたような「〇×以外の自分で考える力」が必要です。授業の取り組み方も勉強の仕方も、自主的にどんどん進めていくような印象を受けました。

設計の授業の際は個人で取り組み、最後にその成果を発表します。先生から選ばれた数名が発表しますが、その中にいつも呼ばれる同期生がいて、その人の考え方には自分に

ない柔軟な発想があって、プレゼンテーションもとてもうまかったです。取り組み方は自由なので、それぞれが持っている個性が出てきます。そういう意味ではすごいなと思ったと同時に、とても刺激になる存在でした。



■卒業生

大学は自由です。怠けようと思えば怠けられますし、頑張ろうと思えばいくらでも頑張れます。自分が将来どうなりたいかや今どうやりたいかを考えないと、4年間で終わってしまいます。

大学院に進んだのはもっと勉強したい気持ちと、小林研究室でやっていた街路と光環境の研究活動が面白く、これをきっかけにして街作りに興味が出てきたため、あと2年間取り組みたいと思ったからです。

そういう意味では、大人になるにつれて将来やりたいことや自分の得意なことが分かってきたので、学部時代はいろいろと考える時間だったかなと感じています。

大学生活ではサークル活動に力を入れていたそうですね。

■大学生

私は高校生からずっと合唱をやっていて、大学ではそのつながりでアカペラサークルに所属して活動しています。アカペラは6人でバンドを組んで演奏することが多いのですが、よく自分たちで立候補してライブに出演していました。

例えば、都市大に数十あるサークルの中でも、より上手なバンドを選出するためのサークルライブが1年に1度あり、まずは各サークル内でオーディションを行います。ここでサークル内の先輩や、外部の学生アカペラで有名な人などに審査してもらって出場者を絞っていきます。

以前にテレビで取り上げられて以来、やりたいと思う学生が増えてきて学生アカペラ界は盛り上がっています。都市大学では創設5年目くらいですが、私たちの世田谷キャンパスには120名ほどの部員がいておそらく規模では1番ではないでしょうか。バンドによってはどんどんライブに出よう、自分たちのペースでやっていこうなど、方針は自由ですが、私が所属しているサークルは積極的な先輩と組むことが多かったのでライブへの出演も増えました。

●就職活動、仕事について

就職活動で工夫したことはありますか？

■卒業生

私は面接官と対話をしたかったので、成功体験ではなく失敗体験の話をしたり、理系ですが理系の

話をせずに新聞勧誘のアルバイトの話をしたり、話す内容には気をつけていました。履歴書を見ても分からないような話をすることで、相手に関心を持ってもらい、対話につなげていくという狙いがありました

卒業生はどのような職業に就いていますか？

■先生

不動産関連の企業にはここ最近で毎年1名程度は就職しています。街づくりに関して言えば、興味を持っている学生はたくさんいて、公務員になる卒業生も多いです。例えば公務員として、景観形成特別地区で景観条例を策定する仕事をしている卒業生もいます。

私の研究室に限って言えば、研究方向がだんだんと部屋の中の環境から街へと向かっているのも、それに伴って学生の関心もディスプレイや照明から外に向かっています。

● 5年後に向けて

将来の夢を教えてください。

■大学生

せっかく建築学科に入って設計を学んできたので、ものづくりに関わりたい思いがあります。この大学に入った時は建築士として設計をどんどんやっていきたいと思いましたが、アルバイトで接客をするうちに人と話をしながらものを作ることに興味が出てきて、人とより密接に関わりたと思っています。一般の方は建築の具体的な内容は知らないことが多いので、自分が建築学科で学んだ知識で消費者と建築界の橋渡しのような仕事をしたいです。例えば、インテリアアドバイザーやカラーコーディネーターのような、消費者に近い位置にいて将来的には建築業界の窓口になれば良いですね。



■卒業生

街づくりを通して、面白いことをたくさんしたいです。そのために、日々、街を歩きながら、いろいろなイメージをふくらませています。

■先生

卒業生が活躍してくれること、そして自分の研究でいえば街全体が美しい夜景を作りたいです。ひとつの道路や建物だけではなく、建物のあかりと、広場のあかりと道路のあかりとが調和した夜の風景を作りたいです。

例えば、今は行政と関わる仕事が多いですが、その場合は道路上や公共の場所しか使えません。一方で、民間の方々と一緒に仕事をすると、ある敷地の中しか演出する場所がありません。こうした区切られた区間だけではなく、民間も、住宅も、道路も一緒に街全体のあかりを良いものにしていきたいです。

様々な制約があるので基本的には難しい問題ですが、その間に大学が入ることで垣根がなくなるとまでは行かなくとも、コラボレーションできる可能性が広がるのではないかと考えています。

先生の研究の社会的意義はどういった部分にあるのでしょうか。

■先生

デザイナーがこれまで持っていなかった視点でデザインを試みています。

光のデザイナーは、見た目のデザインにこだわる人が多いですが、見た目の美しさ以上の光のデ

ザインをするのです。例えば、こういうあかりにすると自然に人同士の距離が近づいたり、あるいはそこに1時間以上いると話し方が変わったりするのではないかと、といったことを研究していました。こうした要素は見た目からでは分かりません。

光の明暗にこだわって、暗くした方が周りの音などを感じられるという試みもよくやっています。これもなかなか瞬間的には分からない要素です。

人は暗くなると、何か悪いことが起こるのではないかと直感的に思ってしまいます。しかし、しばらくするとその暗さに慣れるので、いつも以上に周りのことが見えてきたり、気づかなかった音に気づくようになったりします。

デザインの価値には様々な尺度があると思いますが、光のデザインには人がまだ気づいていない価値がいくつかあると思います。その発想をデザインに込めて、人と自然の調和に活かすということです。

例えば、先日二子玉川で行ったイルミネーションは樹木が対象なので、木に電飾を飾り付けたいところですが、そうすると電飾しか目立ちません。そこで私たちは二子玉川地域の風の強さに着目し、風にあおられた葉っぱの「美しい揺れ」を訪れた人に伝えようと考えました。美しさを光で表現するために、葉に反射板を一つひとつ付けると、風が吹く度に反射板に光が当たってキラキラします。すると、見た目は地味ですが、実は「風が吹いている時にこんなに樹木は揺れているんだ」ということに気づいてもらえるようになります。

●高校生へのアドバイス

高校生がやっておいの方が良いことはありますか？



■卒業生

あまり考えすぎずにとりあえずやってみること、挑戦するクセをつけることですね。それは旅行でも遊びでもなんでもいいと思います。やったことがないことにチャレンジするのは苦勞しますし、失敗することもあります。それが良いきっかけになることもあります。

■大学生

やりたいことをやってみることは大切です。

私は高校生の頃から建築学科に絞っていて、あまりほかのことを考えませんでした。

建築学科に入ると、当たり前ですが建築のことを中心に勉強します。そうするとせっかく建築を学んだので、これを活かせるようにしたいとその先の就職までリンクしてくるので、将来設計の一環として高校生のうちから、まずはいろいろな学問に積極的に触れていた方が選択肢が広がるのかなと思います。

■先生

もし高校生に戻れるのであれば、海外旅行に行きたいですね。

大学に入ってからにはよく海外に行くようになり、東南アジアやアフリカなどの集落が好きになって、旅行していました。日本の中には、「日本にあって当たり前」と思う環境に対する疑問は生まれませんが、海外に行くと視点が変わってくるので、今の日本の環境の良さや悪さや改良すべき点について、いろいろな発見があります。私自身はとても勉強になって、感性がより一層磨かれましたが、もっと高校生のうちから海外に行っておくべきだったと思っています。

大人になるとそうそう驚くこともなくなってくるのですが、インドには衝撃を受けました。

インドの田舎の方はまだ昔ながらの生活をしていて、人の生活と動物と植物と山と川が一体化しています。それを見ると、「日本の江戸時代はこんな風だったのかな」などと改めて感じます。「自然と一緒に暮らそう」などと建築家はよく言っていますが、根本的にはこういうことではないかなと考えさせられます。そんな場所が残っていることも驚きですが、かえって未来の生活のあり方があるのだと思います。

最後に、進路選択のアドバイスをいただけますか。

■先生

できれば実際の授業風景や演習、卒業設計展のような学生が取り組んでいる活動を見た方が、自分に合っているかどうか分かります。

工学部は実際にものを造ったり学生同士でディスカッションしたりという部分が、一番重要な学びの場だと思うので、その様子を見ることです。

本学には絶えずいろいろな高校生がキャンパス見学

に来ています。入試センターでキャンパス内の見学は随時募集しているので、キャンパス見学を試みることをお勧めします。私自身も高校生の時に、大学がこういう実習をするということをまったく想像していなかったので、実際に見てみることは良い経験になります。



●インタビューに答えていただいた方々●



■先生

小林茂雄先生

東京都市大学工学部建築学科 教授

兵庫県立兵庫高等学校出身。東京工業大学工学部建築学科卒業。東京工業大学大学院総合理工学研究科社会開発工学専攻修士課程修了。東京工業大学大学院総合理工学研究科助手、武蔵工業大学工学部建築学科講師、准教授、ネバダ州立大学ラスベガス校客員研究員を経て、現職。



■卒業生

山根拓馬さん

平和不動産株式会社 開発企画部 街づくり推進室勤務（2015 年度取材当時）
鳥取県立鳥取東高等学校出身。武蔵工業大学（現：東京都市大学）・工学部・建築学科卒業。卒業後、同大学大学院に進学し街路と光環境について研究。現在は不動産業界で再開発事業に関わり、街づくりを通じた地域の活性化に尽力している。



■大学生

矢野瑶子さん

東京都市大学・工学部・建築学科 3 年生（2015 年度取材当時）

神奈川県立大船高等学校出身。高校時代より建築士に憧れ、建築学科に入学。設計・建築を学ぶかたわら、接客業の経験から人との関わりに着目。将来は建築学科で学んだ知識を活かし、一般の人々と建築界を結ぶ仕事を志している。

※内容は 2016 年 2 月当時のものです。